

ノーサイド

北原 巖 男

が感じられます。ところで、隊員の皆さんとご家族の皆さんそして本紙読者の皆さんの中には、古い短編小説ですが、菊池寛の「恩讐の彼方」を読まれた方も多いと思います。この著名な小説の題名「恩讐の彼方」には、もちろん著者による特別な言葉ではあ

りません。小説を読んだ・読まないうえに、僕たち日本人が、それぞれの心の中に共有している普遍的な、しかし、心の機微に触れるような深い日本語です。そして、これまで遭遇した辛い人生体験の中で、「恩讐の彼方に・・・」と、懸命に自分自身に言い聞かせ、かくあるうと、努めて来たことを思い浮かべ

る方もおられるのではないのでしょうか。恨みやわだかまりを捨てた善隣外交を力強く展開して行くこととする気負い

はとても難しいことだと思

います。僕自身もそうです。そして、このような事態が生起するのは、個人と個人との関係だけでは留まりません。世界各地で、国と国や民族と民族の間で生起している侵略戦争や紛争、各種の弾圧などは、枚挙に暇がありません。

かつての東ティモールとインドネシアの間でもそうでした。1975年11月から約24年間、インドネシアは東ティモールの独立回復

恩讐の彼方に

闘争に対する激しい武力攻撃や拷問等、様々な弾圧を行ってきました。当時の東ティモールの人口約80万人のうち、何と人口の四分の一、約20万人の皆さんが犠牲になりました。ちなみに、インドネシア軍人は、約3800人が亡くなっています。

日東ティモールが独立を回復して以降、今日までの22年間は、「和解(Reconciliation)」、良好な未来志向を合言葉に、良い歴史があったこと、と、忘れないう、忘れてはならない。

スハルト大統領以降、現在のジョコ大統領まで5人の大統領がいますが、東ティモールの独立回復闘争にはいられていません。第二次大戦開始直後、オランダとオーストラリアの連合軍は、当時中立であったポルトガル領ティモールを予防占領。これを受けて旧日本軍は1942年2月に同島に上陸・連合軍を撃退、終戦まで占領。東ティモールは日本に対する補償は求めていません。

かつかつての東ティモールとインドネシアの間でもそう

が変わっています。しかし、その政権にも差異はあります。スハルト大統領は、もうい

・我々は、独立闘争の中にも、隣国インドネシアと未来志向の関係を構築して行かなければならない。

闘争に対する激しい武力攻撃や拷問等、様々な弾圧を行って

・我々は、許すことがで

・我々は、許すことがで

闘争に対する激しい武力攻撃や拷問等、様々な弾圧を行って

・我々は、許すことがで

・我々は、許すことがで

闘争に対する激しい武力攻撃や拷問等、様々な弾圧を行って

・我々は、許すことがで

・我々は、許すことがで

闘争に対する激しい武力攻撃や拷問等、様々な弾圧を行って

・我々は、許すことがで

・我々は、許すことがで

闘争に対する激しい武力攻撃や拷問等、様々な弾圧を行って

・我々は、許すことがで

・我々は、許すことがで